

## 事業創造大学院大学 2016 年度第 1 回諮問委員会議事録

1. 日 時 2016 年 9 月 5 日 (月) 14:00 から 16:00 まで
2. 会 場 事業創造大学院大学 5 階会議室
3. 出欠状況

《出席》

[委員]

五十嵐 典明	亀田製菓株式会社 執行役員総務部長
金川 貴宣	北越紀州製紙株式会社 人事部長兼労務担当部長
長谷川 佳高	株式会社テレビ新潟放送網 取締役経営企画局長
早川 博	株式会社コメリ 取締役執行役員 (代理出席：佐々木学 経営企画室 I R 担当)
吉田 至夫	株式会社新潟クボタ 代表取締役

[大学]

仙石 正和	事業創造大学院大学 学長
五月女 政義	事業創造大学院大学 副学長・研究科長
富山 栄子	事業創造大学院大学 副学長
唐木 宏一	事業創造大学院大学 教授
岸田 伸幸	事業創造大学院大学 教授

《欠席》

[委員長]

青井 倫一	明治大学グローバル・ビジネス研究科 研究科長
-------	------------------------

[委員]

大森 映治	三井住友銀行 執行役員
奥澤 淳	日本電気株式会社 新潟支店長
杉本 孝信	新潟県庁総務管理部長
高橋 建造	新潟市役所地域・魅力創造部長

《陪席者》

佐久間事務局長、江川事務局次長、松山学務部長、吉田教務課長、高野教務課員

### 4. <議事次第>

1. 開会
2. 前回議事録の確認
3. 報告事項と質疑応答
  - (1) 経営系専門職大学院認証評価結果報告および検討課題に対する対応方針について
  - (2) 教員組織の変更について(含む、教員採用状況)
  - (3) COC+事業活動計画と実施状況報告
  - (4) 海外交流協定校との取り組み状況報告

- (5) 大学連携新潟協議会ビッグデータ・オープンデータ活用研究会活動報告
- (6) 2016 年度ゼミ長会議活動予定
- 4. 質疑応答（全般）と議論
- 5. 今後議論すべき課題の確認
- 6. 閉会

#### <配布資料>

- 資料 0 議事次第
- 資料 1 委員名簿
- 資料 2 席次表
- 資料 3 2015 年度第 2 回諮問委員会議事録
- 資料 4 経営系専門職大学院認証評価結果報告および検討課題に対する対応方針について(認証評価結果、検討課題、改善計画)
- 資料 5 教員組織の変更について
- 資料 6 COC+事業活動計画と実施状況報告(ハノイ・ビジネスマッチング、新潟県立大学サマーセミナー、ブランディング WG、COC+シンポジウム、オープンフォーラム NIIGATA COC+、COC+セミナー)
- 資料 7 海外交流協定校との取り組み状況報告(インドネシア・カンボジア国際交流、サラスワティ外国語大学学長来学、中国提携校交流行事)
- 資料 8 大学連携新潟協議会ビッグデータ・オープンデータ活用研究会活動報告(実績と計画、高齢者の健康関連ビッグデータセミナー)
- 資料 9 2016 年度ゼミ長会議活動予定

## 5. 議事経過

### 1. 開会

研究科長五月女より配布資料の確認、出席委員の確認を行った。

学長仙石より本委員会の開催趣旨説明と本学がとっている対応へ忌憚のないご意見をいただきたい旨の挨拶があった。また、青井委員長が急遽、体調不良により欠席したことから、進行を研究科長五月女が務めることになった旨の説明を行った。

### 2. 2015 年度第 2 回諮問委員会議事録の確認

前回委員会の議事録を確認した。

研究科長五月女：別途、議事録についてご意見等がある場合は事務局へ連絡願いたい。

### 3. 報告事項と質疑応答

- (1) 経営系専門職大学院認証評価結果報告および検討課題に対する対応方針について

研究科長五月女が分野別認証評価結果の報告および検討課題に対する対応方針について説明を行った。

委員：課題解決計画に「インパクトファクターの高い学術誌への掲載を推奨・評価する」とあるが、こういった学術誌への掲載状況はどうか。

五月女：インパクトファクターの高い学術誌は英文誌が大半であり、掲載されている日本の論文も自然科学系が多い。日本では社会科学系は少なく、非常にハードルが高い。

仙石：文系は非常に弱い。世界に論文が出ていっていない。先日発表された大学のランキングで東京大学がアジアの中でも上位に位置付けられていない最大の理由もこれである。

委員：評価基準を変えていくとあるが、現時点で方針や具体的なものはあるか。

五月女：従来から、社会的活動などを含めて点数化して評価していたが、今回は、特に研究業績に関する評価について、評価の対象や項目を明確にするというのが趣旨である。

仙石：いきなり評価を変えるわけではない。現在は準備段階であり、このようなことは積み重ねていくものと認識している。

五月女：ハードルを高く設けると論文そのものが出てきにくくなる。直近は質と量の両方を見ていきたい。

## (2) 教員組織の変更について(含む、教員採用状況)

研究科長五月女が教員組織の変更として、2016年3月末に3名の専任教員が退任したことに伴う教員の補充ならびに拡充の状況について報告を行った。

## (3) COC+事業活動計画と実施状況報告

副学長富山が第3回ハノイ・ビジネスマッチングとベトナム現地調査の実施計画について報告を行った。

研究科長五月女が新潟県立大学主催「海外の学生と新潟県内の学生による2016年度第4回サマーセミナー『グローバル時代の地域力』の実施概要、COC+ブランディングワーキンググループ、COC+シンポジウム「地域の未来創生に向けた新潟の魅力発見」プログラム、オープンフォーラム NIIGATA COC+、COC+セミナー開催予定について報告を行った。

委員：今回はベトナム・ハノイだが、今後は他の国でもビジネスマッチングを行う計画はあるか。

富山：ニーズがあれば検討する。3年前に日本人の社会人院生からのリクエストがきっかけでスタートした事業であり、修了生を中心に行うことから、現在は修了生が多いベトナムのみとなっている。カンボジアやタイなどにも修了生がいるのでリクエストがあれば検討したい。

五月女：留学生にベトナム人が多いこともあり、現在は同国だけの開催となっているが、今後は拡大していきたい。

(4) 海外交流協定校との取り組み状況報告

教授岸田が国際交流活動としてインドネシアおよびカンボジアへ出張し、交流協定校を訪問した目的や概要、成果などのほか、7月にサラスワティ外国語大学（インドネシア）学長視察団が本学に来訪した概要および中国の交流提携校との交流行事計画について報告を行った。

(5) 大学連携新潟協議会ビッグデータ・オープンデータ活用研究会活動報告

教授唐木が研究会の実績と計画および9月14日に開催する高齢者の健康関連ビッグデータセミナーについて報告を行った。

委員：主管はどこか。イニシアチブを取っているのはどこか。ゴール設定はどうなっているのか。

唐木：主管は新潟大学の山崎達也教授が中心となって進めている。ゴールは現時点で明確になっていない。活動していくために、まずは資金が必要となるが、助成金をどうするかなどは具体的に決まっていない。

委員：他県や国の参考となる事例はあるか。あれば倣っていく方法もあるのではないか。

唐木：具体的にどうやって進めるか、きっちり固めていこうという段階だ。

仙石：唐木の前任者が経産省の委員を務めていて、山崎教授は総務省との関係をお持ちで、それに県立大学の先生を加えた3人がキーパーソンとして推進していた。これを起爆剤にして県を牽引していきたいという考えに本学も協力させていただいている。

(6) 2016年度ゼミ長会議活動予定

教授唐木がゼミ長会議主催イベント「県内環境先進企業の取組み視察会」の実施概要について報告を行った。

4. 質疑応答（全般）と議論

委員：経営系専門職大学院の評価基準が今一つ分かりにくい。教員の評価、データベース、卒業生の活躍などの評価項目があるようだが、海外では同様の評価機関があるのか。

五月女：海外の認証評価については、評価のサイクルや項目などが日本とは異なっており、意味合いも違っている。特に人文社会学系に関してはグレーゾーンな部分もあり、評価が難しいところではある。

仙石：日本の場合は、大学を設置するときの基準が厳しいことが特徴だったが、最近はそうではなくなってきた。米国の場合は認証評価が通らないと州立大学などは予算が減らされるため必死である。ネームバリューで独自にやっていける有名大学は評価結果に左右されないかも知れないが。

委員：延辺大学短期滞在計画の話があったが、認証評価では教員の論文に関わる事項もあり、教育活動に関わる時間と自身の研究活動の時間の確保の両立を迫られるだろうが、限られた時間の中でどうしているのか。何を犠牲にしているのか、何を削っているのか。例えば、委員会活動とは何をするのかよく分からないが、その活動を減らすことのデメリット、メリットなどが、よくわからない。

五月女：委員会組織は学校運営に必要な様々な活動を担うとともに、認証評価のチェック項目ともなっている。大規模校も本学のような小規模大学でも学内委員会などの組織は同様の体制が求められるため、結果として各先生が委員会を掛け持ちせざるをえないというのが実態である。それらも含め、教員の研究活動の時間確保について指摘された点である。

仙石：今回の認証評価では、教員の研究実績を上げるには、サバティカル・リープの制度設置位などの対策を講じないといけない、というプレッシャーを受けたと理解している。本学の場合、所帯が小さいため教職員が互いに協力して、様々な業務を担うことで、出来るだけ各人の負担を減らすようにしている。他大学の中には何を決めるにも教授会の権限が強く、会議ばかりで時間を取られてしまい、研究の時間確保に苦勞していると聞いたこともあるが、本学では事務局も協力して迅速に対処している。

委員：学校運営のマネジメントと執行の役割をはっきりさせないといけない、ということだろう。

委員：データベースのイメージとして、どのようなデータがあり、どのようなことがわかるのか、どう活用されるのか知りたい。

五月女：一例として、あるデータベースでは、上場企業の長期時系列の財務諸表や経営指標などのデータがエクセルベースでダウンロードできるなど様々な情報を取得することができる。

委員：COC+活動が実施された背景を教えてください。

富山：新潟で育てた学生を地元へ残すための就職先作り、国際交流、地域創生、産業創造、社会人学び直しプログラム、学生研修などを目的に作られたが、まだキックオフしたばかりで、これから活動が本格化する。

仙石：日本の大学は地域にあまり貢献していないのではないかと、という声がある。一般論としてあり、地方創生や地域創生などに関しては、やはり大学などが中心になって進めていくべきだろうという動きがあって、文部科学省が大学が自ら手を上げた活動に対して予算を付けたという背景がある。

委員：ビジネスマッチングなどを通じて、海外とのパイプが以前に比べて更に太くなっている印象を受けたが、具体的なメリットは何か。

富山：プレゼンを通じた修了生と参加院生とのネットワーク作りである。一般に、現地の取引先を探すことはとても難しいことであるが、信頼で

きる修了生を通じて良いビジネスパートナーを紹介してもらえ、流通チャンネルを見つけることができるというようなことも大きなメリットである。派遣院生を含め、ビジネスマッチングや現地企業視察などもあるので、非常に有意義なイベントである。

委員：海外でのビジネス展開となると、現地での言葉の問題も含めてほぼゼロからのスタートとなり、軌道に乗るまで5～6年はかかってしまうが、それでは現代のスピード感に乗り遅れる危機感がある。また、海外事業はリスクが大きい印象があるが、ビジネスマッチングではこれらのリスクを減らすことにも繋がるだろう。

五月女：特に留学生は修了して海外へ戻ってしまうと関係が薄くなってしまいがちだが、本学にとって修了した学生は資産であり、その意味でもビジネスマッチングは修了生とのネットワーク作りと絆をより深めるための機会でもあると認識している。

委員：認証評価では五つの指摘事項があり、多岐にわたっている印象を受けるが、「教員の募集・任免・昇格」に対する解決策として、例えば報酬の水準の話になってくるのか。具体的には、高報酬を条件に高度な論文を作成できる教員を招聘することは考えているか。

仙石：財務状況など経営に関することは、今回受審した分野別認証評価の対象とはなっていない。教育に関わる大学の中身を評価しに来ている。確かに、前述のランキング上位にあるシンガポールの大学では世界中から教員を招聘しており、論文の評価も高いだろうが報酬も高いものと思われる。ただ、本学が今回指摘を受けている点は、論文の質を高めるために、サバティカル・リープのような、研究機会・時間の確保にむけた環境整備という点にあると理解している。

委員：留学生の採用に際して、日本語能力のN1は必要だと実感したが、国際化やグローバル化となれば、母国語のほか、日本語と英語ができないと厳しいだろう。

五月女：国内のある大学のMBAコースは英語だけで授業をするため、日本語能力が不十分な留学生も多く、結果として、日本企業に就職できないというのが実態であるという話を聞いた。本学では留学生に対して修了までにN1取得を目標としつつ、MBAのビジネス知識も修得できるという特徴があり、就職の面でも有利に働いていると認識している。

## 5. 今後議論すべき課題の確認

学長仙石が総括として、本日の意見への御礼と次回への協力依頼を行った。

## 6. 閉会

五月女：これで2016年度第1回諮問委員会を終了する。